

シリーズ わがまちの文化財へ15

町指定文化財 宇山祭祀遺跡出土遺物

昭和62年11月11日指定

宇山祭祀遺跡は、世羅町寺町の宇山地区にあります。遺跡は峠の頂にあたり、道路改良工事により露出し、その存在が明らかになりました。

鏡や勾玉、動物、人、武具などと思われる土製模造品が数多く出土しましたが、その特徴から6世紀後半のものと思われま

す。古来から峠は往来の難所・要所とされており、和歌などにも詠まれています。峠の神は荒ぶる神とされ、人々を悩ませたことが

想像されます。「峠」の語源は「手向」とも言われており、それを裏付けるように、平安時代以降

は荒ぶる神への供え物として、幣（布や紙を彩色したもの）を用意したことが書物などに見られます。宇山祭祀遺跡から出土した土製模造品は、そういった幣の前身ではないかと考えられています。

一見すると粘土遊びで作ったもののように感じますが、当時の実物を考える上で格好の資料であり、人々の生活や信仰、想像力などを垣間見ることが出来る資料でもあります。実物は大田庄歴史館に常設展示されています。



シリーズ わがまちの文化財へ16

町指定民俗文化財 だんじり仁輪加狂言

昭和63年8月1日指定

だんじり仁輪加狂言は、胡社の夏祭り（廿日えびす）で行われている民俗芸能です。胡社は、市を守り、商売繁盛をもたらす神とされていることから、市場町には必ずといっていいほど祀られる神です。今高野山の門前町として発展し、その後今高野山城主の市場町として栄えた現在の甲山本通りの歴史を裏付けるものと言えます。元々は神事として行われていた祭事が、江戸文化の華やかな祭礼形式の流れによって、現在のような形になったと考えられています。

黒や朱の漆塗りに飾り金具を付けた山車に、三味線や太鼓などの囃子が乗り、引き綱に引かれて通りを練り歩きます。各所で山車を止め、仁輪加狂言が始まります。台本はすべて自作で、現代者や時代物、

時代風刺のものが多く、必ず最後に「オチ」が付きます。観客からの掛け声やヤジに

応じてセリフが変わるなど、演じ方と観客の一体感も仁輪加の特徴です。

昼間には、吊人形と呼ばれる子ども達による行列も行われ、祭りに華を添えています。

